



姫路、相生、そして原子力

内閣府原子力委員会前委員長
東京工業大学名誉教授

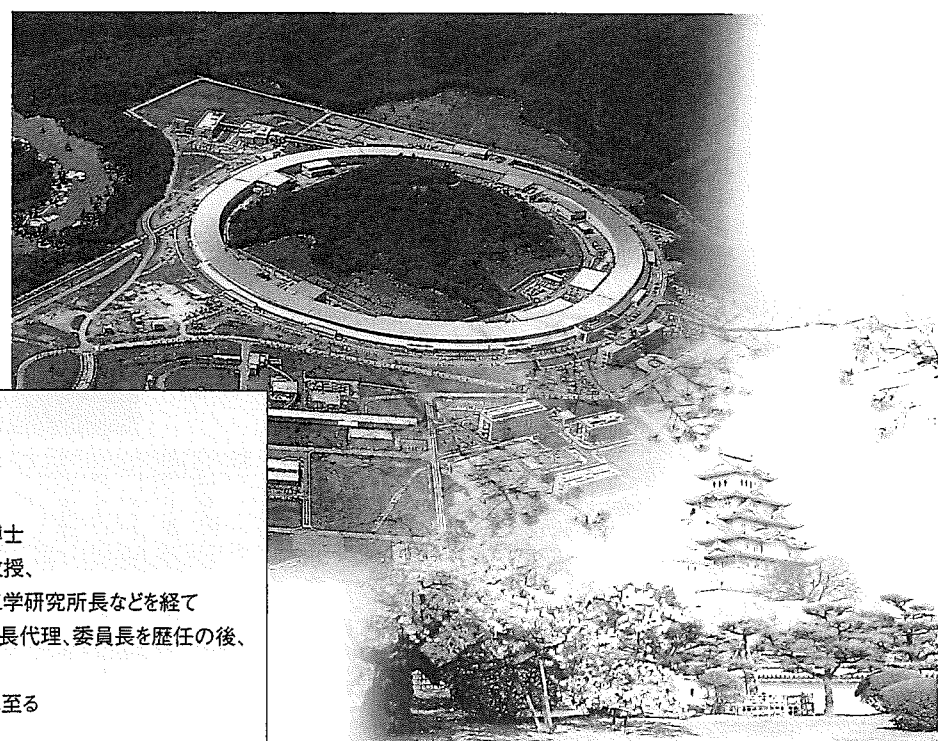
藤家 洋一

赤穂に近い相生で生まれ育った。戦中は毎年、姫路の連隊が赤穂に向けて夜間行軍する軍靴の響きに12月14日(赤穂義士祭)を意識した。高校は姫路に通った。戦後数年の日本社会にはまだ混乱が残り、衣食住がままならない状態、停電も多かった。我が母校、姫路東高も校歌には「白鷺城を仰ぎ見る学舎」とあるものの実態は兵舎跡であった。しかし、教室の窓から見る白鷺城の雄姿は夢と安心感を与えてくれたように覚えている。その頃始まった校舎の改築に伴う2部授業はまさに戦時の再来と思えた。午後に学校に來て授業を受けた。卒業まもなく、今度はお城の改築となった。姫路のシンボルがと心配する友人もいたが、お色直しも済んで雄姿を再び見せてくれている。

東高の教育はリベラルで、自由な高校生活が送れた。多くのことを自ら学ぶことが出来たことを誇りに思っている。また、先生方との距離も近く、今でも恩師との交流が続いているのはうれしい限りである。播州を離れて半世紀を過ぎ、今や関西出身とも思ってもらえないようだが、赤穂浪士ことは今でも頭の中に強く残っているし、「さざなみ軍記」に見る室津も思い出にある。特に白鷺城を間近に見ながら、多くの友人に恵まれて過ごした高校時代は私の思考の原点と言つて過言ではないように思う。

原子力を天職とする事になり、大学において化学反応に根ざした石油文明から、核反応が支える原子力文明への転換が持つ意味を探り、また、近年は国の原子力政策に直接関わる立場から、国内だけでなく国際社会との接点も多く、国益を考えた議論や意思決定にも参加した。いろいろな機会に、お前は日本人的でないとの評価をいただくことになったのも、高校時代のリベラル教育で得た幅の広さかと昔を懐しみ感謝している。

このように、日本は原子力先進国となり、今後は世界の、そしてアジアの中で、原子力発電に加えて、先端性に富む原子力科学技術の世界を切開いていくことになる。播磨はその拠点としての役割が求められ、姫路はその中心都市に位置付けられている。播磨では人類の最



《プロフィール》

- 1954年 姫路東高等学校卒業
- 1958年 東京大学理学部物理学科卒業
- 1963年 同大学院博士課程修了・工学博士
- 1968年 大阪大学助教授、名古屋大学教授、東京工業大学教授、同原子炉工学研究所長などを経て
- 1995年 内閣府原子力委員会委員、委員長代理、委員長を歴任の後、2004年1月退任
- 1996年 東京工業大学名誉教授、現在に至る